

# 幕末維新期の会津藩士の真情

—— 韋軒・弘毅斎・羽峰の漢詩唱和 ——

## 一、秋月韋軒「北越潜行」詩

明治元年（一八六八）、会津鶴ヶ城を「官軍」に明け渡した直後、会津藩の軍事奉行添役であった韋軒秋月胤永は、「有故潜行北越。

歸途所得（故有りて北越に潜行す。帰途得る所）」と題する十二句から成る古詩を詠じた。これは鶴ヶ城明け渡しの後、猪苗代で謹慎中であつた韋軒が、藩を滅ぼさぬこと、藩主の助命、藩士の事後の進退などについて、旧知の長州藩士弘毅斎奥平謙輔に願う所があつて、河井善順という若松真龍寺の住職智海の従僕に身を簞して北越に赴いた折に詠じたものであつた。

その本文は次の通りである。今『韋軒遺稿』（大正二年刊）巻一から私訓を添えて引用する。

行無興兮歸無家 行くに興無く 歸るに家無し

國破孤城亂雀鴉 国破れて 孤城 雀鴉乱る

## 池澤一郎

治不奏功戰無略

治せんとするに功を奏せず 戦ふに略無し

微臣有罪復何嗟

微臣罪有り 復た何をか嗟かん

聞説 天皇元聖明

聞説く 天皇元より聖明

我公貫日發至誠

我が公 日を貫く 至誠より発す

恩賜赦書應非遠

恩賜赦書 応に遠きに非ざるべし

幾度額手望京城

幾度か額手して 京城を望む

思之思之夕達晨

之を思ひ之を思ひ夕べより晨に達す

憂滿胸臆淚沾巾

憂ひ胸臆に満ちて 涙巾を沾ほす

風漸瀝兮雲慘愴

風漸瀝として 雲慘愴

何地置君又置親

何れの地にか君を置き又た親を置かん

人口に膾炙する名篇なので、通釈は省略する。

第一句や第十一句に見える「兮」字は、語調や間を整える文字で、『詩経』などに収録される古詩に頻用される。第九句の「思之」というのが、『詩経』邶風「柏舟」などに見える古風な言い回しであるのに対応する。第五句の「聞説」の下に闕字は、以下に続く「天

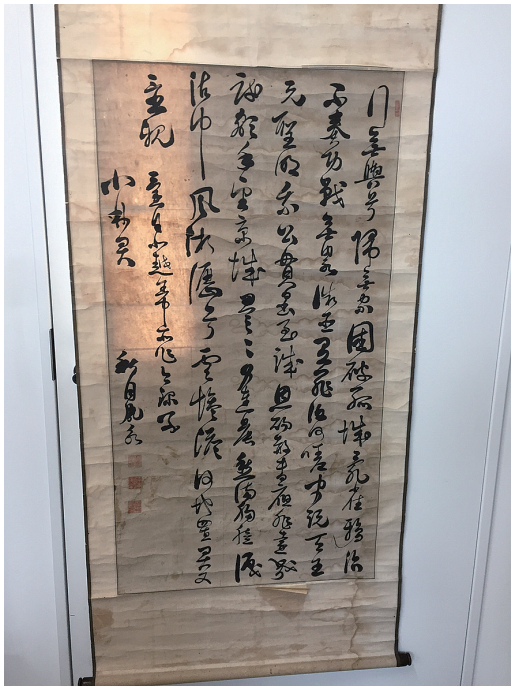
皇」に敬意を払ってのもので、版本原文でも空白がある。版本原文には上層欄があつて、そこには南摩羽峯と豊島洞斎との二種の評語が見える。一は「又曰、一字一涙、語語發自肺腑中、一讀動人、（又曰く、一字一涙、語々肺腑の中自り発す。一読すれば人を動かす）」というものである。この評語は本詩が韋軒の肺腑の中からほとばしり出たものであることを言うもので、一文字読む毎に一滴の涙を流して感「動」する人は羽峯その人に他ならぬが、「發自肺腑中」という評語が、本詩の第六句と呼応していることも、後に説くことに絡んで看過しえない。つまり、会津藩主松平容保の、尊皇の精神は、「肺腑」＝至誠より発するもので、決して官軍の薩摩長州諸派に劣るものではないという主張がここにはこめられていて、「日を貫く」という述語は、後の羽峰の詩では、主語として「白虹」を戴くが、ここではそれが「我公」となっている。羽峰の詩ではもうひとつ「貫日」という表現があるが、その主語は「至誠」である。韋軒の詩では「至誠」は「貫日（白虹）」の発する起点とされている。要するに、右の韋軒の詩とすぐ後に引用する羽峰の詩とを対照すると、「我公（松平容保）」＝「白虹」＝「至誠」＝「貫日」という図式が成り立つ。そしてこの「白虹」は、ここでは会津藩主松平容保の天皇に対する忠誠心を象徴する。従つて「貫日」の「日」は天皇を暗喩する。厳密に言えば、右の韋軒の詩にあつては、会津落城後の天皇であるから、容保が絶大なる信頼を得てしばしば宸翰を奉じた孝明天皇ではなく、明治天皇である。

「至誠」という語は、単に通り一遍の詩語であるに止まらず、会津藩士にとつては魂の精髓であり、特に容保とともに明治維新の後も生き残つた秋月韋軒や南摩羽峰にとつては、極めて重要な位置を占める語である。『会津藩庁記録』巻一に収録される、文久三年三月廿五日付の江戸会津御用所宛の京都御用所からの書簡末尾には「畢竟ハ至誠貫天之格言之通御誠實貫達致候故之義二候。各様ニも晝夜御辛勞御精力之段ハ何共執筆難及事共二候」などに見えることは特筆すべきことであり、藩主容保が二の足を踏みながらも結局幕府の要請黙しがたく、京都守護職についたのも、強硬な佐幕攘夷派であつた天皇に一時的に開国路線を認めさせ、公武合体を実現して、絶大の信頼を博し得たのも、いずれも「至誠貫天」の精神に発するもので、私する所はほとんどなく、矯激な縉紳公卿や薩長によつて、「不忠」「逆賊」のレッテルを貼られるごとき要素は微塵も備えていなかったと、藩主容保も彼に仕えた秋月も南摩も天地身命に誓い得るのであつた。「至誠」は諡が忠誠公であつた藩主容保の代名詞たりえていたことについては、南摩羽峰の「寄懷在東京人（懷ひを東京に在るの人に寄す）」（『環碧樓遺稿』詩鈔卷一）に「我公至誠白日識、廟堂豈無公正評（我が公の至誠白日すら識る、廟堂豈公正の評無からん）」という一聯があるのにも看取できる。

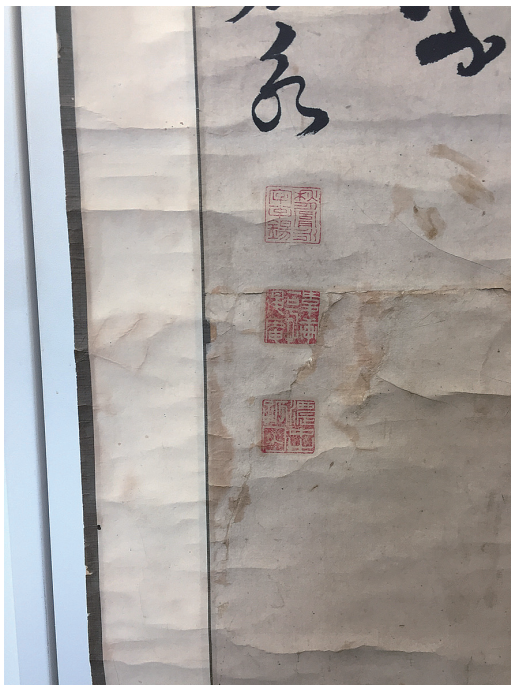
因みに秋月と行を共にすることの多かつた廣澤安任の、二十九歳の安政五年に昌平黌への入学が認められた折の詩にも「欲依大義舉綱維、一決此心復奚疑。休逐末流頻口舌、至誠自有貫天時（大義に

依りて網維を挙げんと欲し、一たび此の心を決すれば復た奚をか疑はん。末流を逐ひて頻りに口舌するを休めよ、至誠自づから天を貫く時有らん。」という句がある（一九一九年『農事雜報』一三八号、五三～五六頁、『開牧五年紀事』『牧老詩蒐』）。結句「至誠貫天（日）」が会津藩士の魂の精髓であることが窺えよう。南摩羽峰も同じように会津藩士として「至誠」の二字を金科玉条としていたことは、昌平黉の後輩に向けた「勸學歌」（『環碧樓遺稿』詩鈔卷二）で「躬行率先死而已、至誠必感人與天（躬行率先して死するのみ、至誠必ずや人と天とを感じしめん）」と詠じたことに窺知される。

洞斎豊島毅の評語は「洞斎曰、九死一生思君慕親之外無餘地、衷



幕末維新期の会津藩士の真情





情至矣、此詩已膾炙於人口（洞齋曰く、九死一生なるに、君を思ひ親を慕ふの外、余地無し。衷情至れり矣。此の詩已に人口に膾炙せり）。「衷情至れり矣」は羽峯の「肺腑の中自り発す」と同じことを評するものである。この詩が人口に膾炙することは、今も処々にこの韋軒の詩を書した掛け軸が寓目されること、詩吟を嗜む者にとつての好個のテキストであり続けていることなどに示されている。かく言うわたくしも古書展の片隅に二足三文の値札を付して無残にも打ち捨てられていた本詩の書軸を一点蔵している。（前頁写真）

次にこの詩をふまえたと思われる南摩羽峰の長編古詩を見るわけだが、韋軒と羽峰とが一心同体とでも評すべき盟友であり、その詩精神においてもたやすく両者を二分できぬことを知るために、亡き友韋軒に捧げるべく、羽峰が涙を吞んで綴った二篇の文章を読んでおきたい。

## 二、南摩羽峰編「韋軒遺稿序」と「秋月子錫墓碑銘」

まず、「韋軒遺稿序」を羽峰の遺稿集『環碧樓遺稿』巻一について見る。

韋軒余知心友也。幼同學藩校日新館。及長。又同入茗甕。螢窓雪案。爾汝切磋。無所諱憚。情誼兄弟不啻。而資性學業各不同。韋軒性嚴急。而余寬恕。韋軒專攻文。而余兼武。韋軒說經。固守程朱。而余時折中今古。韋軒苦學。往往夜不就枕。而余每宵

限時必寢。其相異如此。而其交親密莫逆者何也。蓋有所同矣。忠孝彝倫之大本是也。大本既同。又何問枝葉。

往者藩主忠誠公之守護京都也。韋軒從焉。周旋於天朝幕府及諸藩之間。鞠躬勞頓。知無不言。行不顧身。官於北海道也。冒冰雪艱苦。盡力墾拓。戊辰之役。奔走於彈雨硝煙之中。遂蒙嚴譴。赦後奉職朝廷。黽勉竭力。終始不負所學。余詳記之其碑文中。故不復贅。余才學不及韋軒。然大本既同。遭遇出處。亦有略相同者。可不謂之知心友哉。

韋軒之學行如此。文詩非其所長。頃日其子浩治胤繼拾取遺稿。問序及評於余。其文詩皆發肺肝。故能動人。非絺字繡句者所敢企及。其所不長者。猶如此。則其所主之學之遂可以知也。余恐讀此卷者。不知其爲人。徒文詩視之。故略叙其平生如此。

嗚呼韋軒逝矣。余又與誰共語心事。相切磋臨叙黯然沾襟。

右の「韋軒遺稿序」においても、私に太字で示したように「其文詩皆發肺肝故能動人（其の文詩は皆肺肝より発す。故に能く人を動かす）」とあった。この韋軒の詩句が「至誠」に発するが故に人を感動させるという評は、ただに「北越潜行詩」に冠せられるに止まるものではなかった。

右に「往者、藩主忠誠公の、京都を守護するや、韋軒從ふ焉。天朝幕府及び諸藩の間に周旋す。鞠躬勞頓し、知りて言はざるは無く、行ふに身を顧みず。北海道に官たるや、冰雪を冒して艱苦し、力を墾拓に尽す。戊辰の役、彈雨硝煙の中に奔走し、遂に嚴譴を蒙

る。赦後、職を 朝廷に奉ず。黽勉として力を竭くして、終始字ぶ所に負かず。余詳らかに之を其の碑文の中に記す。故に復た贅せず。(かつて、藩主容保公が、京都守護職に着任するや、韋軒は随行した。京都では朝廷と幕府と諸藩の間で周旋をなして、身を粉にして働き、考えはすべて発言し、身命を賭して事に当たった。蝦夷地の知事を務めるに当たっては、雪と氷の世界で苦勞して、開墾に力を尽した。戊辰戦争では、弾丸と硝煙の渦中を馳せ巡って働いたが、城を明け渡し、新政府によって嚴罰に処せられた。赦免されて後は、明治天皇に仕えて、挺身し、若き日から学んだ実践躬行の学を體現した。わたくしはこれらのことを詳細にその墓碑銘に綴った)」とする。

その墓碑銘「秋月子錫墓碑銘」(『環碧樓遺稿』文鈔卷二)を次に引用する。韋軒と羽峰とが「弟兄ただ畜ならざる」とも言える間柄にあったことが内容に徴しうる。この墓碑銘を刻した秋月の墓石は、都営青山霊園に現存する(一の口の十二の二十六)。篆額は容保の嫡男松平容大である。ここには青山霊園の墓碑銘の文章を掲げる。碑に刻せられたもののほうが、『環碧樓遺稿』所収のものとは語彙における異同があり、かつ五十字ほど長い。永井荷風は、外祖父鷺津穀堂の碑文を東京向島の白髭神社に掃苔して、撰者三島中洲の文集『中洲文稿』第一集所収のテキストと比較して、原碑のほうが長いことを指摘、最終的に依拠すべきは、文集のテキストではなく、碑に刻されたものとした(『改訂 下谷叢話』第四十一)。通常、諸家の「墓碑銘」のテキストは文集が死後出版されることもあり、碑に刻され

たテキストよりも推敲が加えられたものが多いと判断されるが、撰者生前に建立された碑文のテキストのほうが、真意を伝える場合もある。南摩羽峰の撰文もまた同じ事情下にあつて、南摩の真意をより直接的に反映するのは石刻の文だと判断される。紙幅の都合で遺憾ながら、翻字のみで、訓読は削除する(文中、ゴシックは池澤)。

#### 秋月子錫墓碑銘

從四位子爵松平容大篆額

吁嗟、余忍銘吾子錫哉。子錫少余。當銘余而余反銘之。天何奪吾子錫之速也。雖然余與子錫生同郷。幼同戲。長同學。識子錫莫余若焉。則銘之者、非余而誰。子錫諱胤永。子錫其字。號韋軒。稱悌次郎。姓平。其先出自葛原親王裔孫千葉兼胤第二子。

曰丸山重次。是為中世祖。重次九世孫頼堅。仕會津藩祖保科土津公。相傳五世為胤道。子錫其第二子。妣杉本氏。文政七年七月二日生。有故稱秋月氏。幼學藩校日新館。年十九至江戸。師松平慎斎。慎斎曰、學之要在知道、不在詞章訓詁。子錫自此專力經籍。弘化三年入林祭酒之門。學昌平黌、為書生寮舍長。及去賞賜官版書五部。子錫嘗受經義於金子霜山、国史令格於栗原又樂、文詩於藤森天山。大有所得。既而以藩命、歷游海内。觀政、察俗、著觀光集七卷。又録列藩名君賢臣事實、為十卷、供藩主施治之資。文久二年藩主忠誠公、任京都守護職。使子錫先上京經畫諸事。後常參帷幄。尋為儒者見習兼侍讀。又為中川親王及二條關白顧問。頗得信任。所裨補不少。當此時、鎖港攘夷之論、紛起。訛言外艦入攝海。朝廷命吾藩巡視海岸。尋命諸藩

築砲台于攝海。子錫皆與焉。時藩主意在佐幕府尊王室明大義名分。而幕政衰頹、紀綱不振。諸藩士、藉尊王攘夷說、煽動朝紳。時勢甚棘。子錫周旋其間。左支右五。苦心極至。爲刺客所覷者、屢矣。慶応元年轉蝦地代官。挈家移舍利。乃設魚塲、闢草萊。居一年藩命赴京。時嚴寒積雪裂肌墮指。人或勸緩行期。子錫不肯曰、事急。豈臣子安逸之日邪。十二月發程。備嘗艱苦。明年三月達京師。職復舊。無何德川慶喜公解大將軍職。王室中興。守護職亦廢。明治元年正月伏見烏羽戰起。東兵敗。藩公從前大將軍東歸。子錫亦歸江戶。公以驚擾近畿爲己罪托謝表於諸藩上之朝廷。子錫專與其事。而書不達。公與子錫相尋歸國。西師陸續逼會津。子錫參軍務。赴越後水原。藩采邑也。自此轉戰各地。「及事急、子錫入城、爲副軍事奉行。常侍公傍。既而米澤使來曰、西師實王師也。不可抗。宜速乞降。公乃使子錫等、抵米澤議之。子錫」參畫尤力。亂平。拘東京獄。尋幽熊本藩邸。二年朝議以藩老萱野長修。爲抗王師首謀。賜死。以子錫爲從。禁錮終身。幽高須藩。既而轉名古屋藩。又幽青森縣。五年正月特旨見赦。三月爲左院少議生。尋進五等議官。叙正七位。遷太政官七等出仕。無幾官廢。子錫歸會津。買田圃。栽桑茶以立養母營生之基。十一年母年八十八。子錫大開壽筵賀之。越二年母歿。喪畢。至東京下帷、授徒。無何補教導職。歷任中教正東京大學教諭第一高等中學教諭。轉第五高等中學教授。叙從六位。進三等官。子錫之至熊本也。應能久親王之召。講經。且喜其土俗淳朴。常謂

不可失此美風。乃率先行動儉。生徒斐然從之。嘗爲子錫開古稀壽筵。會者五百餘人。亦可以見諸人景慕一斑也。二十八年辭職。歸會津。移竹浣花。優遊與世相遺。三十年進正六位。三十二年移東京。十二月暴病。翌年一月四日特旨進從五位。明日遂不起。壽七十又七。葬青山之塋。子錫爲人。膽大氣壯。接人溫和。德輝粹然溢詞色。平生勉學不倦。其在昌平黌。燭以繼晷。終夜兀兀或凭几而眠。覺則又讀。人不見其就枕。深信程朱之學。最長經世。若文詩則其緒餘。然亦往往有足感動人者。處事果斷。雖當難局。夷然無遲疑之色。常曰經世之術。必原諸性命之微。性命之微。必發諸治國之用。則學不陷于理屈。治不流于霸術。嗚呼此數語足以知子錫本領矣。配遠藤氏。生二男一女而歿。子錫初養兄胤昌子胤浩爲嗣。先歿。長男浩次承家。浩次曾遊學米國十餘年。委身商業。次男胤逸爲陸軍少尉。子錫又養塚原氏子胤繼。以女配之。繼學業。胤繼卒大學之業。繼室丸山氏無子。銘曰

學主性理 入洛闕室 志在經世 長沙維匹 處事明斷 百折不屈 交人至誠

中外洞徹 其學其德 有本有末 吾銘其墓 非諛是實 斯石雖朽 斯銘不滅

明治三十四年一月 高等師範黌教授從五位勲五等南摩綱紀撰文 並書

末尾の銘文の第七句において「人と交はるや至誠」と羽峰は詠じる。「至誠」はこの場合、韋軒が交際において誠実無比であることという。韋軒の場合、特に会津藩と藩主忠誠公容保への態度に至誠は極まる。既に羽峰は、「韋軒遺稿序」において、秋月は詩作においても「其文詩皆發肺腑故能動人」と評していた。「肺腑より發す」は詩文の表現においての至誠のあらわれであった。「至誠」の結晶なるが故に「往往にして人を感動せしむるに足る者有」るのであった。

さて、右の碑文が刻されたのは明治三十四年、羽峰は、時に六十六歳である。碑文が『環碧樓遺稿』に録されたのは、明治四十二年の死から三年後の明治四十五年のこととなる。碑文が拓本となって配られる相手は、韋軒と羽峰の知友や親族、法事に参加する人士に限られる。版行の文集では、不特定多数の読者の目に触れる。その読者の中には、会津藩を「逆賊」「賊軍」と呼んで恬として恥じぬ者も存する。石刻のテキストが、文集収録に際して改編された理由はそのような配慮による。

冒頭の三つ目の文が「子錫少余一歳」から「子錫少余」と改められたことは、一八二三年十一月生まれの羽峰と一八二四年七月生まれの韋軒との年齢差が実際には、一年にも満たぬ故の省略であろう。問題は「明治元年五月伏見鳥羽戦起」以降の件に存する。ここには「東兵敗」と見える。「東兵」は会津藩を含む奥羽列藩同盟の諸兵を指す。小林修氏の『南摩羽峰と幕末維新期の文人論考』（八木書店、

二〇一七）の「第三部幕末維新の残影」「二、中根香亭―あるいは『兵要日本地理小誌』伝説」には、幕臣であった中根が綴った、文部省出版の教科書的書籍『兵要日本地理小誌』の中で、徳川を奉ずる諸藩を「東軍」または「東兵」と呼び、薩長の兵隊を「西軍」と呼び、決して前者を「賊軍」、後者を「官軍」と呼ばずに長州の鳥尾小弥太の勘気を蒙り、文部省の職を辞した「伝説」について、詳細な検討を加えられた。この墓碑銘も、会津憎しの人士が校訂すれば、「東兵」は「賊軍」とされていたであろう。小林氏は、右の書

中で中根が「西軍」と綴った所は、悉く「官軍」に改められたが、「甲斐誌」の一箇所だけに、「西軍」という表現が残ったとする。羽峰の綴った秋月の墓碑銘原文において「東兵」、「西師」と見えるのは、会津の薩長への抵抗の精神の反映と評しうる。「東兵」を「賊軍」と改めることは、『遺稿』のテキストでも為されなかったので、羽峰は以て瞑すべきだが、「西師」という語を含む部分は抹消され、「征討師」と改変された。『遺稿』を編纂した三島中洲、土屋鳳洲、羽峰自身もまた秋月の墓碑銘において「西師」「西軍」を「官軍」とはしなかった。墓碑銘中「西師」なる語を含む部分で抹消されたのは「及事急、子錫入城、為副軍事奉行。常侍公傍。既而米澤使來曰、西師實王師也。不可抗。宜速乞降。公乃使子錫等、抵米澤議之。子錫」という条だ。奥羽列藩同盟の中、先に「官軍」に降伏した米沢藩に責めを帰する記述を厭うたのかも知れぬが、「西師」を「官軍」「王師」と呼ばぬ精神は『遺稿』でも残存し、米沢藩の「西師



は実に王師なり。抗す可からず。宜しく速やかに降を乞ふべし」という判断を、羽峰は明治三十四年の段階でも認めなかったのであろう。「東軍」「東兵」を決して「賊軍」とはしない、あるいは「西軍」「西師」を決して「官軍」「王師」とはせぬ精神の持主で羽峰はあった。それは都営谷中霊園現存の三島毅撰文の「羽峯南摩先生碑銘」(甲三号五側、『中洲文稿第四集』下所収)が「既而遭伏見之變。侯從徳川公。東去。留先生大阪。竊察形勢。官軍譏察綦嚴。」と「官軍」の語を遣い、土屋鳳洲撰文の「南摩羽峯先生傳」(『晚晴樓文集』二編卷五)もまた「明治元年正月三日。伏見鳥羽戰起。東兵敗。先生受命。潛匿大阪。竊觀形勢。時官軍填」と、さすがに「賊軍」とはせぬも「官軍」とし、「當是時。奥羽諸藩連盟。抗王師。及會津城陷。爲官軍所獲。錮于越後高田」というように、「官軍」と同義で「王師」という語も使用したことに對比すれば際立つ。三島は備中の人、土屋は和泉の人であつた。中洲の主君備中松山藩の板倉勝静は、領地が官軍に占領された後も、官軍に抵抗し、函館五稜郭に立て籠つた。ために松山藩は「朝敵」とされたのである。中洲は川田甕江等と藩の存続と藩主父子の助命の為に尽力した。松山藩と藩主父子の命を救つてくれたことへの恩義があつて「官軍」「王師」としたのであらう。救つてもらつたのは会津も同じだが、領地を同胞の血で汚され、孝明帝からの絶大の信任が白紙にされて「朝敵」とされた恨みはそれだけ深かつたのだ。

ところで、かく「賊軍」「官軍」という用語を厭う羽峰ではあるが、

「兵」「軍」「師」という文字には細心の注意を払う。軍隊としての規模では、「兵」よりは「軍」、「軍」よりは「師」が大であつて、それがそのまま敬意の深さの表現となる。従つて、「東軍」とはせずに「東兵」とした点に羽峰の謙虚な姿勢が表出されていて、「西軍」とはせずに、「西師」としたところに、「官軍」「王師」とはしないにしても、薩長藩閥政府支配下に禄を食む者としての妥協も反映される。一方、会津藩を蛇蝎視した長州藩士はどうであつたか。右に触れた鳥尾小弥太のように「官軍」「賊軍」という呼称に拘泥した者が大勢を占めたであろうが、秋月と交友のあつた若輩の奥平謙輔の用字はやはり注目すべきであらう。その遺稿集『弘毅斎遺稿』(聞源子明名久矣云々詩註)では、会津藩兵など東北諸藩の幕軍を「東師」と呼んでいて、右の羽峰の「西師」と好一対をなす。長州藩士でありながら情理備えた相手への敬意を込めた手紙で、会津藩に降伏を選択させただけのことはあつて、きめ細やかな文学的センスを備えていた。そしておそらくはこうした羽峰の気概はそのまま、「交情の親しき、弟兄も啻ならざる」(『環碧樓遺稿』卷三「哭秋月韋軒並引」原漢文)韋軒の気概でもあつた。次節で見る長編の無題詩で鋭鋒当たりがたいものとして示される。

### 三、南摩羽峰全六十四句無題詩

小林修氏が前掲書に紹介される、『碧環樓遺稿』未収録の漢詩の



中に、全六十四句から成り、「明治三年春正月」の年次のみを記す無題の長編古詩がある。小林氏はこの詩を昭和五〇年（一九七五）の『会津会々報』第八一号の相田泰三氏の「南摩綱紀の詩」という一文から摘記された。この詩は右の韋軒詩の後に作られ、作者羽峯は先に引用した韋軒の古詩を意識しながら本詩を詠じたと思われる。羽峯の漢詩中最長なる叙事詩なので、煩を厭わず、各句に通し番号を付して引用する。

- 1 白虹貫日自至誠 白虹日を貫く 至誠自りし
- 2 浮雲蔽月豈損明 浮雲 月を蔽ふも豈に明を損はんや
- 3 一朝天地屬闕瑟 一朝天地 闕瑟に属す
- 4 正邪萬古有公評 正邪万古公評有り
- 5 憶曾吾公護禁闕 憶ふ 曾つて吾が公 禁闕を護り
- 6 拮据多年灑心血 拮据多年 心血を灑ぐ
- 7 蒼生薰浴公德澤 蒼生薰浴す 公の徳沢に
- 8 天皇依頼公忠節 天皇依頼す 公の忠節に
- 9 秋風講武建春門 秋風 武を講ず 建春門に
- 10 日射兜鍪映旌旛 日は兜鍪を射て 旌旛に映ず
- 11 天顏有喜違咫尺 天顏 喜び有り 咫尺 違るのみ
- 12 水干馬鞍恩賜新 水干馬鞍 恩賜新たなり
- 13 何物姦賊逼九重 何物ぞ 姦賊 九重に逼り
- 14 砲丸屢及紫宸宮 砲丸屢及ぶ 紫宸宮に
- 15 吾公護衛王墀側 吾が公護衛す 王墀の側

- 16 死士鏖戰安聖躬 死士鏖戦して 聖躬を安んず
- 17 洛中洛外賊氣消 洛中洛外 賊氣消え
- 18 天王山上賊營空 天王山上 賊營空し
- 19 天意倦々渥賚賜 天意倦々として 賚賜を渥くす
- 20 御詠宸翰褒忠義 御詠宸翰 忠義を褒し
- 21 曾屈至尊辱禱祀 曾つて至尊を屈して 禱祀を辱くし
- 22 一掃吾公二豎祟 一掃す 吾が公二豎の祟りを
- 23 治極亂生人耶天 治極つて乱生ず 人か天か
- 24 隨吾典型妬吾賢 吾が典型に隨うも 吾が賢を妬む
- 25 利吾幼帝逞其意 吾が幼帝を利用して 其の意を逞しうす
- 26 幽吾皇子廢撰關 吾が皇子を幽して 撰關を廢す
- 27 將軍恭謹敢肯違 將軍恭謹 敢肯へて違はんや
- 28 解其官職返其權 其の官職を解いて其の權を返す
- 29 浪華城中送歲除 浪華城中 歲除を送る
- 30 人情洵々一紛然 人情洵々一に紛然
- 31 伏水一戰捲旗鼓 伏水の一戰 旗鼓を捲き
- 32 將士南乘紀海船 將士 南のかた 紀海の船に乗り
- 33 江都城郭依然求 江都の城郭依然として求き
- 34 會津草木待公還 會津の草木 公の還るを待つ
- 35 兒女歡抃爭迎拜 兒女 歡抃して争つて迎拜す
- 36 貳虎如雲從連綿 貳虎 雲の如く從ふこと連綿
- 37 吾公抗疏謹待命 吾が公 疏を抗くして謹んで命を待つ

- 38 其奈浮雲蔽帝關 其れ浮雲の帝關を蔽ふを奈んせん  
 39 兵馬陸續來相迫 兵馬陸續として來りて相ひ迫る  
 40 借名王師極慘覈 名を王師に借りて 慘覈を極む  
 41 賊吾鷄犬盜吾寶 吾が鷄犬を賊ひ 吾が宝を盜む  
 42 掠吾村落火吾宅 吾が村落を掠め 吾が宅を火く  
 43 越々武夫争盡力 越々たる武夫争つて力を尽くし  
 44 唱義人越自河北 義を唱うる人河北自り越え  
 45 殺氣衝天唐睢陽 殺氣 天を衝く 唐の睢陽  
 46 腥風捲地齊即墨 腥風 地を捲く 齊の即墨  
 47 金湯三旬城不陷 金湯 三旬 城陥らず  
 48 衝突屢退百萬敵 衝突屢退く 百萬の敵  
 49 枕城元期鳥居子 城を枕にして元より期す 鳥居子  
 50 鐵丸義固皆奮激 鐵丸 義固くして皆奮激す  
 51 忽驚日月旌旗靡 忽ち驚く日月旌旗靡き  
 52 即施吾弦折吾矢 即ち吾が弦を施め 吾が矢を折る  
 53 君臣分離鴻鯉絶 君臣分離して鴻鯉絶え  
 54 天涯墮角三千里 天涯 墮角 三千里  
 55 秋風吹衣淚有痕 秋風 衣を吹きて涙痕有り  
 56 杜鵑哭血魂將死 杜鵑 血を哭して魂將に死なんとす  
 57 浮雲蔽月不多時 浮雲 月を蔽ふこと多時ならざらん  
 58 至誠貫日天人知 至誠 日を貫く 天人知らん  
 59 鐵券丹書華旌詔 鐵券丹書華旌の詔

60 青鳥御來自丹墀 青鳥 丹墀自り御え来る  
 61 陸奥山河連滄海 陸奥の山河 滄海に連り  
 62 管轄遠及古蝦夷 管轄遠く古蝦夷に及ぶ  
 63 齊王乃富魚鹽利 齊王乃ち魚塩の利に富めり  
 64 肇得宗社萬年基 肇め得たり 宗社萬年の基

本詩内容の概略はすでに小林修氏が前掲書（二四四頁）で記されているが、各句に対応させて再度内容を確認する。歌い出しの四句（1～4）については、後述する。次の四句は、苦渋の選択をして、藩主松平容保が京都守護職に就任した文久二年（一八六二）閏八月から慶應三年（一八六七）十二月京都守護職が廃されるまでの五年間を総括する一段であり、就任当初の京都の町民の歓迎ぶりや孝明天皇が絶大の信頼を会津に寄せるさまが叙されている。

次の四句（9～12）は、文久三年七月三十日の天覧馬揃えによって、八月二日に容保が錦陣羽織二巻と白銀二〇〇枚を孝明天皇から賜ったことを詠じる。

次の四句（13～16）では、事態が突如暗転する。元治元年七月の蛤御門の変における、御所への発砲が詠じられる。小林氏も指摘されるように、羽峰は容保を排除せんとした長州藩を「姦賊」と呼ぶ。この戦闘の結果、一会桑政権が樹立し、容保は孝明天皇と強固な信頼関係で結ばれるが、一方で長州藩の恨みを買った。長州藩士ながら、公明正大な眼を曇らせず、秋月との友情の存した故に、会津藩を亡国から救った奥平謙輔は、戊辰戦争時も会津藩を賊軍、姦賊と

は呼ばずに「東師」「東軍」と呼んでいたことにはすでに触れた。

彼が萩の乱失敗後に斬首される寸前に詠じた「絶命詞」(『弘毅斎遺稿』)において、「誰か知らん丙子に姦を除くの事、乃ち是れ戊辰敵愾の心なるを」という一聯を詠じたことは記憶にとどめたい。「丙子除姦事」とは、萩の乱を指す句であり、奥平は政権を掌握する大久保、井上等を「姦」と表現していた。秋月、南摩、奥平は精神の気脈を通じていたことは歴然としていた。かつて「戊辰」戦争時に「敵愾の心」を抱いて、幕府軍と相對峙した時には、奥平も彼等薩長の一員であったことを、この一聯は悔恨とともに表出する。

17・20句では、蛤御門の変の後、京都一円が鎮まり、長州兵が恨みを含んで撤退した後、幕府方の宿営は解かれたが、容保と会津藩兵は、なおも小御所の庭に宿衛を続け、朝廷はこれに御饌を賜ったという一條を叙する。18句の「天王山」は長州藩の主戦論者の拠点であったが、真木保臣、宮部春藏などが七月廿一日に火薬に火を放って爆死した。20句の「御詠宸翰」は、孝明天皇が文久三年の八月十八日の政変以後、容保が和歌を愛好することを踏まえて、時に御詠と称して内密に宸翰を賜ったことを受け、蛤御門の変の終結の功をねぎらって、刀剣や敕賞を賜ったことを詠じる。

21句から24句では、まず蛤御門の変での連日の宿衛で病いを重篤にした容保の体調を案じた孝明天皇が元治元年九月六日にその病氣平癒を祈願し、その祭事における洗米を賜り、四月二十八日に天皇の恩賞に容保が感涙にむせんだことを詠じるのが、21・22句。23・

24句は、長州征伐にはやる会津藩を幕府が抑えて因循姑息な振る舞いをくりかえし、やがて薩長が手を結んで鳥羽伏見の戦いの火蓋が切って落とされる前夜の不穏な空気を叙する。24句の「吾が典型に随ひ吾が賢を妬む」の主語は省略されているが、幕府を暗示する。長州征伐になかなか腰を上げず、対戦しても敗北を重ねる幕府への焦燥感が言外に露わである。

25句からの四句において、徳川慶喜の大政奉還、慶喜と容保が京大坂を去って、江戸会津に戻ったことを叙す。31句からは鳥羽伏見の戦いが叙せられているので、本詩が時系列に沿って詠じられているとすれば、25句で明治天皇Ⅱ「幼帝」の即位が詠じられる前に、孝明天皇の死が当然叙せられるべきなのであるが、薩長や攘夷派皇族にとって目障りな存在とされていた孝明天皇の死を、その暗殺説の真偽とともにここで詠じるのは、未定稿にして発表の予定のない作であったとしても憚られたのであろうか。あるいはまた天皇暗殺の真相を知った羽峰の憤懣は表現として定着させるには、あまりにも激烈であったのかも知れない。25句の「幼帝」を利用して思い通りに事を進めたとされるのは、薩長や攘夷派の皇族であることは紛れもないが、主語は省略に従っている。26句の「皇子」は輪王寺宮として寛永寺に幽閉せられた形となった北白川宮能久親王であろう。私見では、本詩の末で陸奥から蝦夷にかけてを領し、「斉王」と呼ばれるのは、奥羽越列藩同盟の「天皇」として推戴された能久親王に擬しうる。王政復古の大号令では、摂関が廃止せられた。27・28

句は土佐藩の山内容堂の建白によって、薩長の機先を制する形で慶喜の大政奉還が実現したことを詠じる。

29・30句は、慶喜、容保が桑名・会津藩兵とともに大坂城に退去し、幕府軍と薩摩軍とが激突せんとする鳥羽伏見戦争前夜の緊張感を詠じる。31・32句は、鳥羽伏見の戦いが、当初薩摩藩と幕府軍との私闘として開始され、薩摩軍が慶応四年年頭に錦の御旗を得て、官軍対幕府軍の様相を呈した途端に、幕府軍の総大将たるべき慶喜が、老中や会津藩主松平容保、桑名藩主松平定敬を強制的に随行せしめ、開陽丸にのって、大坂湾から紀州沖を経て、江戸へ逃げ帰ったことを詠じる。

33から36句は、慶喜と容保とが江戸へ、その後容保は会津に帰着したことを詠じ、容保は会津藩兵を戦場に取り残したことを恥じて藩主を辞任した。そのことを羽峰は露わには詠ぜず、容保の帰還は会津の人々が待ち望んでいたこととする。その後、すでに慶應四年二月十六日には会津・桑名を朝敵とする勅命が下って、三月になると、容保の腰の温まる暇もなく、奥羽鎮撫総督九條道孝が、長州藩の世良修蔵とともに東北諸藩に会津・庄内の征討を命じ、会津藩内では武装防衛、抗戦と降伏嘆願の見解が対立する。36句は薩長が構成する「官軍」を「豺虎」と表現し、連綿と「官軍の」侵攻が続くとするが、これは戊辰戦争最中の情景となる。具体的には右の述べた世良など奥州諸藩に会津征討を迫った世良修蔵などを「豺虎」とするのであろう。

37から40句は、まず会津到着後の容保が藩主を辞任、謹慎して朝廷の命を待ち、慶應四年四月に仙台・庄内・米沢各藩を通じて降伏嘆願書を朝廷に提出し、奥州諸藩は同情的であったが、薩長には嘆願が退けられたとする。後にも触れるが38句で「帝閭」を蔽って暗くする「浮雲」とは薩長勢力を暗示する。降伏嘆願書が却下され、「官軍」が陸統とせめてくるというのは、奥羽越列藩同盟と「官軍」との対峙の後、七月には磐城平城、二本松城、長岡城などが落城し、八月には母成峠の戦いにも敗れ、「官軍」が破竹の勢いで攻め立てるさま。40句の「名を王師に借る」という表現からは、裏を返せば、羽峰は薩長軍を決して真の「王師」、「官軍」とは認めなかったことが読み取れる。前節で取りあげた秋月の墓碑銘で羽峰が、「西師は王師なり。抗す可からず。宜しく速やかに降を乞ふべし」とした文言は、会津の精神は米沢藩とは異なり、「西師」を「王師」と認めぬものであったということ永遠に伝えんがための所為でもあった。「惨敷を極む」というのは、続く41・42句の「鶏犬」＝桃源郷のよくな平和な世界を「賊（そこな）い、財産を掠奪し、村落に火をつけ家を焼き払うという表現にやや具体化されているが、これは会津白虎隊の悲劇や慶應四年八月二十三日以降の一月月間の鶴ヶ城籠城戦において、藩士やその家族が女性や子供に至るまで二百数十名自刃した極限状況を表現する。43・44句は、西軍に蹂躪されつつも、徹底抗戦した会津藩士を讃え、「白河以北一山百文」（『近事評論』一八七八年八月二十三日付）という東北蔑視の言をふまえる「河北」



という語を使って、公明正大な本当の正義を唱えたのは、会津以北の人士であったことを主張する。

45句から48句までは、会津若松城、こと鶴ヶ城に立てこもった会津軍と西軍との攻防を叙するのに、中国の戦乱の故事を以てした。45句は、至徳二年（七五七）、唐の張巡が河南省睢陽で安祿山の死後、安慶緒を相手に籠城して味方の援護もないまま四百次に亘って徹底抗戦した末に敗れた史実（『旧唐書』卷一八七、『新唐書』卷一九二）を踏み、46句は山東省即墨で城にこもって守勢であった斉の田單が、火牛攻めの奇策で燕の楽毅を破った史実（『史記』卷八十二「田單列伝」）を使う。張巡は会津の藩主や軍師の譬えである。羽峰にとつて「弟兄奮ならざる」（『環碧樓遺稿』詩鈔卷三「哭秋月韋軒」詩引）韋軒もまた不撓不屈の範とすべき先哲として張巡を意識していたことは、『韋軒遺稿』卷一の「張巡」があつて、「大義千年氣貫虹、要爲厲鬼奏餘功（大義千年氣貫虹を貫き、要らず厲鬼と爲つて餘功を奏せん）」の一聯があることに看取されよう。張巡の至誠の氣を「虹」と表現することにも両者の詞藻の通うさまが感得される。46句の斉の田單は史実では勝利するのだが、籠城の末、守勢を攻勢に転じるので、より多くの東北諸藩が抗戦加勢したならば、会津が薩長に勝利する可能性もあったという仮定を史実に託して詠じる。47句は会津若松城こと、鶴ヶ城が慶應四年八月二十三日から九月二十二日までの間、落城しなかったことを讃える。「金湯」は「金城湯池」の略。『漢書』蒯通伝に見える語。堅固な構えの城をいう。48句は会津勢

が九千四百名ほどで、薩長軍が約七万五千名という圧倒的劣勢にもかかわらず、一ヶ月間籠城抗戦を続けたことを讃える。

49句から52句もまた会津若松城での籠城を詠じる。49句の「鳥居子」は、難解だが、旗本幕臣の攘夷佐幕論者としては、会津藩と揆を一にした鳥居耀藏を指すをしたい。東北諸藩も陸続と「官軍」に靡く情勢下、時勢にふりまわされず、決して幕府への忠誠心を失わなかった鳥居耀藏のような存在こそが、籠城の窮地を救う者として期待されたのであろう。弘化二年以降、幕末の政局の転変に運命をもて遊ばれ、讃岐丸亀藩に二十年も蟄居させられた鳥居に、あらぬ汚名を着せられて謹慎の日々を送らざるを得なかった会津藩のものとして、同情の念を禁じえなかった。50句の「鉄丸」は、籠城中の西軍の砲撃を指し、攻撃を受けても微塵もひるまずに抗戦を続けたことを讃える。51句は錦の御旗をふりかざす西軍に瞠目し、52句では刀折れ矢尽きて降伏、城を明け渡したことを暗示する。50句で錦の御旗を「日月の旌旗」と表現していることに着目したい。もとより紅地の錦の御旗には種々のデザインがあつて、金色の日像と銀色の月像を刺繍した二種で一組のものもあるので、自然な表現ではある。しかし、後述するように、会津藩にとって孝明天皇は「日」であり、明治天皇は「幼帝」にして、「月」でしかない。また「官軍」「賊軍」という呼称を容認できなかった会津藩士として、「御旗」という語を使用することを難んじたのであろう。錦の御旗を考案した岩倉具視等は、日月星辰輝けるものを網羅せんとしたのであろうが、

羽峰は本詩において、それを逆手にとつて、会津藩、あるいは藩主容保にとつて、孝明天皇と明治天皇との決定的落差を主張する。ましてや「月」たる明治天皇の夜の輝きは、薩長などの「姦賊」を象徴する「浮雲」に蔽われてさえるのである。錦の御旗はすでに、鳥羽伏見の戦いの時点で、薩長がでつちあげた道具としてへんぼんと靡かせられていたから、ここでは慶應四年九月四日に米沢藩が、十日には仙台藩が降伏し、前節の秋月の墓碑銘で版本からは削除された部分にあつたように、米沢藩が「西師は実は王師なり」と会津にも降伏を勧めたことを暗示する修辭と解する。

53・54句「君臣分離鴻鯉絶、天涯堕角三千里」というのは、会津藩士である羽峰は越後高田藩に謹慎、韋軒は猪苗代に謹慎させられ、藩主容保は、九月二十二日に妙国寺へと移され、十月十九日からは江戸に護送されて君臣の間で音信すらままならないように遠く引き離されたことを詠じる。続く二句は晩秋の風に吹かれて、涙を流すだけでなすすべを知らない死に体の自画像である。季節はずれではあるが、慟哭して血を吐くようにして本詩を詠じる自画像を「杜鵑」とした。この表現は羽峰の別の秋の詩でも「杜鵑哭血緑陰昏、憂心殷殷酒難醺（杜鵑血を哭して緑陰昏く、憂心殷殷酒醺じ難し）」（『環碧樓遺稿』詩鈔卷一「寄在東京人」と繰り返されている）。

57～60句の中、57・58句については本詩において三度反覆される着目すべき修辭として後述するが、明治三年に本詩が詠じられた時点での、希望的未來像であろう。つまり、薩長藩閥が専横を極める

現状は、ほどなく是正され、会津藩と藩主の「至誠」が天皇からも他藩の人士からも再び認められるようになるであろうという希望が託されている。そのことを証し立てる宸翰と詔勅とが、近い將來天皇から会津藩に下賜されるであろうことを詠じるのが59・60句である。

61～64句は、明治二年に生まれたばかりの容保の実子慶三郎容大が、家名相続を認められ、陸奥国三万石の支配を命じられたことを受けて、会津藩が新しい領土で新たな繁栄の礎を築かんことを祝して筆を擱く。翌年明治三年五月に容大は陸奥斗南藩知事に任じられ、明治四年には容保もまた和歌山藩預かりから斗南藩預かりに替えられるが、明治三年正月の年記を有する本作ではそのような動向について内々に側聞する所があつた程度であろう。63句は、会津藩主に該当する嬰兒容大のことを指して「齊王」とする。46句の「腥風地を捲く齊の即墨」という句を受けて、籠城の末に逆転勝利した田單が仕えた「齊王」を出しているわけである。中国の歴史で勝利した斉軍に会津藩兵を擬している羽峰の寓意は深い。精神においては、「西軍」を「官軍」と呼ぶことも、「東軍」を「賊軍」と呼ぶことも、さらには会津藩が敗北したことも決して認めていなかったことなのであるから。この思いが、容保が終生肌身離さず捧持していたという孝明天皇からの宸翰を明治二十九年七月十一日に史談会席上で初めて公表することにまで繋がってゆく（小林氏前掲書二三頁）。「魚塩の利に富む」という表現には、文久二年（一八六一）から慶

應三年（一八六七）まで、六年にも亘って蝦夷地の警衛と代官職に就いた日々の観察が投影されているのであって、決して虚辞ではない。秋月韋軒もまた藩内の妬みを買って慶應元年に一年間だけ、蝦夷地代官職に左遷せられて、羽峰と分治するが、極北の地で苦難を分かち合った者同士という思いは、前節で見た羽峰の撰した韋軒の墓碑銘に露わであった。

全体を概観した上で、先ず着目すべきは歌い出しである。「白虹日を貫く至誠自りし」という第一句は、明らかに韋軒詩の第六句「我が公日を貫く至誠より発す」に由来するものとしたい。ここに「貫日」という語に加えて、「至誠」という会津藩士、特に藩主松平容保の姿勢を形容する語が共通することは看過しえない。松平容保は韋軒と近しかったもう一人の会津藩士廣澤安任に拠れば「公資性温順にして、忠誠の言は肺肝自り出づ」（『幕末会津志士傳稿本』）という人柄であったのである。更に言えば、「至誠自りし」という羽峰の修辭は、韋軒の詩に羽峰が寄せた評語「語々肺腑の中自り発す」「其の文詩皆肺肝より発す」とも無縁ではなく、この修辭の点でも藩主の精神を二人がわがものとしていたことが歴然としている。敢えて強辯すれば、藩主容保の孝明天皇への「至誠」は、韋軒、羽峰にも共有されていて、その精神は詩語の中にも脈々と息づいているということになる。韋軒、羽峰が会津藩士では中堅どころの身分でありながら、藩主容保の京都守護職に随行、上級藩士に妬まれて、会津に戻されたり、蝦夷にまで左遷されるという憂き目を

も共にしたのだが、それを阻めえたのになしえなかった藩主容保に一片の含む所もなかったことがこの「至誠」なる語の共有に示されている。3と4句とは、戊辰戦争の経緯と功罪については、誰も何も語れないこととなったが、誰が正しくて誰が間違っているかについては、天帝がご照覧になっていて、公平な評が下さるべきで、吾が会津藩が逆賊であるとか、賊軍であるということは断じてないということを言外に込めているであろう。

全六十四句というのは、羽峰の長編古詩少なくない中でも最長のものである。最長であり、韻律の規則の緩やかな古詩ではあるが、「至誠貫日」という表現が二度、「浮雲蔽月」という表現が二度、後者については「浮雲蔽帝閭」という表現がほぼ同義であるとすれば、三度ということになり、修辭的には極めて異例であるが、この修辭に注いだ羽峰の情念の熾烈さを反映する。同時にこの反復の間には意味上、微妙な位相差が存し、同じ文字を使用しても指示するものがそれぞれ異なる。すでに韋軒の詩について説明する折りに触れたが、盟友韋軒の詩を、作られた直後に羽峰が知り、満腔の共感を寄せたことには疑いを容れない。版本『韋軒遺稿』の羽峰の評語からもそのことはほぼ確実視される。そして、この版本未収録の長編古詩の冒頭に盟友の表現を借り来ったものと思われる。ただ、そのことを明示しないのは、詩句の内容が忌憚に触れるものである故と推察される。韋軒詩ではまだ曖昧であった表現が、より明確なものとなる。韋軒の詩では「幾度か額手して京城を望む、之を思ひ之

を思ひ夕べより晨に達す」とあつて、天皇の居る宮廷を望見する句と「風漸瀝として雲慘憺」と、その視界を閉ざして、絶望的な「何れの地にか君を置き又た親を置かん」という最終句とが離れていて、手を額にかざして遠くを見ている韋軒その人の視界が「慘憺たる」「雲」や「漸瀝」たる「風」によって遮られることが詩の余韻の中で漸く想到しうる。ところが、羽峰の表現では二度繰り返される「浮雲月を蔽ひ」において、この「月」は「浮雲」によって覆い隠される。そして「月」は中間の句「浮雲帝閭を蔽ひ」で、「帝閭」＝宮廷、天皇を指すものとなるので、「浮雲」は天皇の聡明を邪魔する君側の奸臣たちの存在を暗示する。羽峰が楠木正成を詠じた「賜硯歌贈成瀬大域」で「中興之業遂不終、浮雲蔽日再昏蒙（中興の業遂に終らず、浮雲日を蔽ひて再び昏蒙）」という一聯は、建武の新政が挫折して、後醍醐天皇が吉野に追いやられた状況を詠じて、「浮雲」を足利の比喩とし、「日」を以て天皇を譬えることは詠史のスタイルとして穏当であつたが、本詩では自らが渦中にあつた戊辰戦争前後を詠じているのが破格だ。さらに羽峰の修辭が激烈なのは、二度の反覆において「蔽月」と「貫日」とが対を為し、同じ天皇を指す語でも「日」と「月」とで差別化することである。「至誠」あるいは「白虹」が「貫く」「日」は、松平容保の忠誠を嘉納し、絶大の信頼を寄せて、宸翰を幾度も賜つた孝明天皇である。かたや、薩長や攘夷派の公家に担ぎ出された睦仁親王こと明治天皇を大胆にも「月」と表現していることとなる。太陽には劣るが月には月の輝き

がある。しかし、その夜の輝きですら、「浮雲」＝薩長の奸臣たちの邪佞、に蔽われているとする。この文脈においては「浮雲」が、空に浮かぶ長閑な景物ではなく、『論語』述而の「不義にして富み且つ貴きは、我に於いて浮雲の如し」の寓意がこめられる。三度目の反覆は第57・58句でなされていたが、57句は、会津藩などの東軍の正義が認められぬ時間はそう長くは続かないとし、58句は明治天皇も孝明天皇と同じく会津人の「至誠」を嘉納されるであろう希望を詠じる。「天人知」は『後漢書』楊震伝の「天知る、地知る、我知る、人知る」を約めたものだが、「天」は「日」同様、天皇の暗喩でもあるのが巧みである。盟友韋軒の詩を反覆暗唱して自家薬籠中のものとした上に、さらに一步を進めて、自らの真情を托した詩がこの六十四句の長編古詩であり、その一端をとつても、これだけ激烈な表現を事とするこの詩が、版本に掲載されず、一部の会津の人士にのみ伝誦されるにとどまった所以である。

会津藩、藩主、藩士の「至誠」が孝明「天皇」の魂をも貫いていたということは孝明帝が容保に下賜された数々の御詠の中の「たやすからざる世にもののふの忠誠のこころをよろこひてよめる」と前書きされた「もののふとこころあはして巖をもつらぬきてまし世々のおもひて」に認められる。容保の諡に忠誠公があるが、この御詠の前書きもその呼称をなす一因であろう。

ところで、本詩において会津藩主、藩士の「至誠」の暗喩であり、かつ天皇の象徴たる「天」「日」を貫く「白虹」には、『戦国策』魏



策四で「聶政の韓傀を刺すや、白虹日を貫く」という用例があり、ここでは、椿事が出来た場合の異常な天象ということとなる。すでに小林修氏が指摘されるように、『史記』魯仲連鄒陽列伝にも「昔者、荊軻燕丹の義を慕ひ、白虹日を貫く」とある。荊軻の場合、秦の始皇帝の暗殺に失敗して返り討ちに遭うので、「白虹貫日」は椿事出来の際の天象とはならず、強国秦に一矢報いようとする燕の太子丹の義侠心に報いようとする志の象徴となり、これを淵源として、「白虹」は会津の「至誠」の象徴たりえた。「白虹貫日」は、唐宋の詩文にあまた用例の見られるものであった。初唐、沈彬「結客少年場行」に「義を重んじて生を軽んずるは一劍知る、白虹日を貫き讐に報めて帰る」という場合、仇敵を剣で貫く殺気の象徴として「白虹」は使われる。初唐、賈賁王「辺城落日」には「壯志蒼兜を凌ぎ、精誠白虹を貫く」とあり、これは「至誠」の暗喩とするための好個の先例となる。最も注目すべきは、秋月韋軒の詠史詩「張巡」に「気虹を貫く」とあった盛唐の軍人張巡に「鐵筆歌」があつて、「力拔山兮勢雄、氣貫日兮虹霓（力は山を抜く勢い雄にして、気は日を貫く虹霓なり）」とあることで、羽峰も韋軒も張巡のこの修辭は舌頭に千転させていたであらう。これを受けて、元の鄭元祐の「高昌契侯の三節堂」に「忠誠天を貫き、白虹触起す」とあるのは、「白虹」が「忠誠」の代名詞である。いずれにせよ、羽峰、そして韋軒の用法は、唐土の詩文の用法から逸脱する恣意的なものではないことが確認できよう。

#### 四、奥平謙輔の次韻韋軒詩

韋軒の嘆願を容れて会津藩を存亡の危機から救った長州藩士奥平謙輔は、明治九年（一八七六）に萩の乱で蹶起し、事成らず、斬罪に処せられる。刑死直前に第一節で見た韋軒詩に対して次韻詩を作った。題して「次秋月胤永檻車中韻（秋月胤永の檻車中の韻に次す）」。秋月の原詩は八年前の鶴ヶ城明け渡し後の詠で、詩題にあるように幽閉中であつた秋月が変装して会津を抜け出し、新潟へ奥平に会いに行つた後に作つたものである。奥平はこの詩を秋月が囚人として護送された時期に初めて知つたのであらうか。「檻車中の韻」という表現を取っている。松本健一氏はその著『秋月悌次郎——日本の面影 決定版』（二〇一三、中央公論社）において、この奥平の詩を、萩の乱で蹶起して事破れた後、「虜囚となつて檻車で送られるさなかに奥平がつくつた詩」としているが、「檻車中」というのは、語順からいって、明らかに秋月のことであるので、これは松本氏の誤読である。奥平は秋月の原詩をそらんじていて、その韻字をそのまま使って次韻詩を作つたのだが、「有故潜行北越。歸途所得」という詩題を失念し、ために秋月の詩の成つた状況について「檻車中」でのごとくする誤解があつたのであらう。

詩本文は左の通りである。

内奸未除遑顧家 内奸未だ除かれず 家を顧みるに遑あらんや

轅門草檄字如鴉 轅門檄を草す 字鴉の如し

市城一戰非吾志 市城の一戰 吾が志に非ず

勢如騎虎不及嗟 勢い騎虎の如く 嗟するも及ばず

掃盡妖氛天日明 妖氣を掃ひ尽くせば 天日明らかならん

詔書屢下褒忠誠 詔書屢々下りて 忠誠を褒められん

行者匍匐騎者下 行く者は匍匐し 騎する者は下らん

鼓吹振旅入王城 鼓吹振旅して 王城に入らん

楚囚纓冠晨復晨 楚囚の纓冠 晨復た晨

追懷往事淚霑巾 往事を追懷すれば 淚巾を霑ほす

嗚呼維昔忠孝士 嗚呼 維れ昔 忠孝の士

安有今日負君親 安んぞ今日君親に負くこと有らんや

秋月の原詩は会津鶴ヶ城落城後の明治元年十月の詠であったが、この次韻詩はその内容を踏まえつつも奥平がコミットした明治九年の萩の乱の失敗後の詠である。

第一句・第二句は、明治二年から郷里萩に戻っていた奥平は、維新前夜には攘夷論者であった同志大久保利通等が、維新後は手のひらを返したように、西洋文明に追隨する姿勢を露わにしたことに不満を抑えられず、かえって維新後は攘夷論者となり、政權掌握者たちを蛇蝎視する。前原一誠と組んだ奥平は、藩校明倫館を拠点に県庁襲撃をもくろんで、坂上忠介、今田浪江らを糾合せんとして檄文を草したが、この呼びかけ自体は、前原の意図で奥平は市街戦を不本意としていたがとめられなかったというのが、第三句・第四句で

ある。

第五句は、秋月の「風漸瀝兮雲慘憺」が天皇のまします「京城」を視界から閉ざし、南摩の「浮雲」が「帝閭」や明治天皇を象徴する「月」を「蔽」っていて、謂わば絶望の表現となっていたのとは事変わり、その「慘憺」たる「雲」や「浮雲」を「妖霧」と言い換えて、奥平は果敢にも自らそれを「掃ひ尽」さんとする。同じ君側の姦を詠じて、秋月は婉曲的であり、南摩はやや絶望的であり、奥平は悲壮な覚悟を表出する。それぞれの個性と末路とが一の詩句に凝縮される。奥平の句は積極的な姿勢を示しているが、次の第六句を見るとやはり、明治天皇の周囲から「妖霧」たる薩長藩閥を駆逐することは、ほぼ実現不可能なことで諦観していたと察せられる。ここの奥平の表現は、会津藩が戊辰戦争以前京都守護職時代に、孝明天皇からしばしば褒賞や宸翰を賜ったことを受けて、蹶起してもしも明治天皇の周囲から「妖霧」を取り除けるならば、今上陛下もまた孝明帝のように自分たちをねぎらってくださいであろうと詠じているのである。すでに萩の乱が失敗して収監されている奥平がかかる希望を詠じたとしてもそれははかない絵空ごとなのであった。

「妖霧」という語を奥平は、「聞源子明名久矣云々」詩においては「妖氣慘憺接家邦、擊楫中流夜誓江（妖霧慘憺家邦に接し、楫を撃つ中流夜江に誓ふ）」などと遣っているが、この場合は幕府軍の脅威をこう呼んでいる。さらに「詠讀松陰遺稿有感」においては、「致身誓欲掃妖氣、一夕夢迷東海雲（身を致して誓って妖霧を掃はんと

欲し、一夕夢は迷ふ東海の雲」と詠じているが、これは続く一聯に「今日和親非宿志、當年尊攘所嘗聞（今日の和親は宿志に非ず、當年の尊攘嘗て聞く所）」としてあるので、松陰の肉声を聞いたものとして、諸外国の脅威を「妖氛」と呼んでいる。

前節で見た羽峰もまた詩の中のさまざまな文脈で「妖霧」を遣う。「掃蕩妖氛定京畿、嘉謀密策眞良輔（妖霧を掃蕩して京畿を定めん、嘉謀密策眞の良輔）」（「詠史」）は、信長に仕えた稲葉一鉄を詠じたものだから、戦国時代の戦乱うち続く不穏な空気を「妖氛」とした。

また「海西逆浪連天怒、漠北妖雲蔽日陰（海西の逆浪天に連つて怒り、漠北の妖雲日を蔽ひて陰らしむ）」（「丁酉歲晚有感」）というのは、日清戦争後、日露戦争前夜の日本の北方の不穏な情勢を暗示して「妖雲」とするものである。「蔽は」れる「日」は天皇を暗示するまでの寓意はないであろう。羽峰が「弔白虎隊士墓」で詠じた「妖雲蔽日日失明、天柱折兮地軸傾（妖雲日を蔽ひて日明を失し、天柱折れ地軸傾く）」は、「浮雲」を一目瞭然の不吉のものとして表現したもので、勿論薩長軍を暗示する。ここでは「日を蔽ふ」という表現も続き、ダメを押すように「日明を失す」とする天に「明治天皇の理性や判断力が君側の姦に邪魔されてにぶっている」という寓意が露わであろう。

第七句・八句もまた仮想の幻影を詠じ続ける。「歩く者は土下座し、馬上の者は馬よりおりて、凱旋するわれらの軍隊をにぎにぎしく出迎え、宮中に招き入れるであろう」というのであるが、これは蹶起

が成功して、君側の姦を駆逐しおおせるというありうべからざる状況が実現した場合の幻想であった。十句目に「追懷往事」とあるので、第七・九句を「北征」での勝利に自己陶醉した姿を詠じたとすると、第五句の「妖霧」が会津軍などを指すこととなり、「東師」とした奥平の繊細さに悖るのでその説には与さない。

第九句・十句は、捕縛された後の現実に立ち戻つての詠である。「楚囚纓冠」は、『春秋左氏伝』成公九年の、楚の鐘儀が晋に捕縛された後も、常に楚の冠をかぶって、故国を忘れまいとした故事を使う。「纓冠」は役人としての冠であるから、奥平は自分もとは中央政府に仕える身であったことを寓している。明治九年十一月五日に萩越ヶ浜から東京への渡航に失敗し捕縛された奥平は、弁明の機会を与えられぬまま、約一ヶ月後の十二月三日に斬首されるが、その間の獄中の日々に上の漢詩は成った。「晨又晨」というのは、その獄中の単調な夜明けの反復を詠じる。回顧して涙を滂沱と流す「往事」とは、原詩の作者秋月との交流、とくに原詩が作られる因をなす、会津亡国を救わんとする奥平が秋月に寄せた書簡への返答を口ずから伝えようとして、秋月が若松真龍寺の住職智海こと河井善順の従僕に身を竊して、奥平の陣営がある越後まで潜行したことなどが主幹をなすであろう。

尾聯は、いささか自嘲気味に、逆賊、反乱軍と規定されて、収監された自分であるが、かつては儒学を修め、親には孝を尽くし、干城隊を率いて、天皇にも忠節を尽くした自分であつてみれば、不

孝者、反乱、反逆のレッテルは不本意であると詠じているわけである。

兄弟も嘗ならぬ会津藩の秋月と南摩、そして立場上は敵対した長州藩の奥平との漢詩文を読み込んできた。秋月と南摩、秋月と奥平とは固い精神的紐帯で結びつくばかりか、詩語の用法や詩句の構成、漢字一字に籠めた万感の思いという点で、共通するものがあつた。

これは勝者薩長藩閥政府の価値観に迎合した日本近代史では完璧に捨象される、濃やかな心の襞、エートスを改めてすくい上げる作業であつた。南摩羽峯の詩句「今古茫茫唯搔頭、成亦有妄敗有義（今古茫茫唯だ頭を搔くのみ、成にも亦た妄有り 敗にも義有り）」（『環碧樓遺稿』詩鈔卷一「中秋與諸子。同分三五夜中新月色。二千里外故人心爲韻。得二字」）にあるように、勝者薩長のうべなう史観が絶対的に公正であるはずもなく、もう一度敗者の正義を救済する視点から、日本近代史は見直されるのは当然だが、そのための契機の一は、見て来たような敗者を中心とする幕末維新期の士人たちが遺した膨大な漢詩文を緻密に読み直すことが捷徑と思われる。